岩倉使節団随行留学生（２６名）人物列伝

　－使節団同行留学生４３名と使節首脳追従者１８名　計６１名の一部です。
名前、読み、生年・没年　出身地、出発時年齢、身分は全て「留学生」

６３	大久保彦之進	おおくぼひこのしん	1859 - 1945	鹿児島	１３歳
６４	牧野伸熊	まきののぶくま	1861 - 1945	鹿児島	１１歳
６５	岩下長十郎	いわしたちょうじゅうろう	1853 - 1880	鹿児島	１９歳
６６	山縣伊三郎	やまがたいさぶろう	1858 - 1927	山口	１５歳
６７	鍋島直大	なべしまなおひろ	1846－1921	佐賀	２６歳
６８	松村文亮	まつむらふみすけ	1840 - 1896	佐賀	３２歳
６９	百武兼行	ひゃくたけかねゆき	1842 - 1884	佐賀	２９歳
７０	吉川重吉	きっかわちょうきち	1860 - 1915	岩国	１３歳
７１	黒田長知	くろだながとも	1839 - 1902	福岡	３４歳
７２	金子堅太郎	かねこけんたろう	1853 - 1942	福岡	１９歳
７３	団　琢磨	だんたくま	1858 - 1932	福岡	１４歳
７４	江川英武	えがわひでたけ	1853 - 1933	韮山	１９歳
７５	森田忠毅	もりたただたけ	1844 - 1917	韮山	２８歳
７６	鳥居忠文	とりいただふみ	1847 - 1914	壬生	２５歳
７７	大村純熙	おおむらすみひろ	1830 - 1882	大村	４１歳
７８	清水谷公考	しみずたにきんなる	1845 - 1882	公家	２７歳
７９	坊城俊章	ぼうじょうとしあや	1847 - 1906	公家	２５歳
８０	武者小路実世	むしゃのこうじさねよ	1851 - 1887	公家	２１歳
８１	平田東助	ひらたとうすけ	1849 - 1925	米沢	２３歳
８２	松崎万長	まつざきつむなが	1858 - 1921	公家	１４歳
８３	日下義雄	くさかよしお	1851 - 1923	会津	２１歳
８４	中江篤助	なかえとくすけ	1847 - 1901	高知	２５歳
８５	永井　繁	ながいしげ	1862 - 1928	静岡	９歳
８６	津田　梅	つだうめ	1864 - 1929	東京	７歳
８７	山川捨松	やまかわすてまつ	1860 - 1919	会津	１２歳
８８	吉益　亮	よしますりょう	1857－1886	東京	１５歳
８９	上田　悌	うえだてい	1855 - 1939	東京	１６歳

６３　久保彦之進（利和）（おおくぼ　ひこのしん）1859 - 1945　鹿児島　１３歳
留学生

淡白な生涯を貫いた大久保利通・嫡男　　侯爵

大久保利通の嫡男とて、1859 年、鹿児島に生れる。母は満寿子。幼名・彦熊。彦之進。岩倉使節団の派遣にあたり、弟の牧野伸熊（伸顕）と共に、父に附いてアメリカ留学に赴いた。アメリカでは、先に留学していた薩摩出身の前田献吉（前田正名の兄）と高橋新吉に預けられて、彦之進は主として前田献吉の、弟伸熊は高橋新吉の世話を受ける。

二人ともニューヨークのピークスキル幼年学校に入学、次いでフィラデルフィアのマンチュア・アカデミー（中学校、大学の予備校）へ入学した。何を学んだかは特に記録が残っていないが、帰国すると開成学校に入っている。その後、大蔵省主計官を経て、貴族院議員を務めている。188１年日本鉄道株式会社の発足には岩倉具視と共に尽力した。西南戦争で財政不足に悩んでいた新政府は、井上勝の国有鉄道創設の主張にも拘らず資金調達に悩んでいた。高島嘉右衛門はそんな状況を見て、岩倉具視に対し、「華族、士族が家財をもって会社を興せば将来の資産安定につながる」と説得して岩倉もその気になり、薩摩出身の大久保利通とも親交のあった奈良原繁（1834 - 1918）を創立委員長として、大久保利和（彦之進）にも関与させている。

１８８８年、具体的に甲武鉄道（新宿/立川、のちに中央線となる）を発足させ、当初は奈良原が社長となるが、半年後に社長を大久保利和に譲っている。因みに、当時私鉄と言っても、実態は「会社というのはほんの名のみで、全く一個のお役所」と政府管理色が強かったようだ。最初から、国有化が想定さ財政難で私鉄で始まったのが実態である。

大久保利通の長男として大久保家を継いだ侯爵でありながら、弟牧野伸顕に比し、利和は歴史に記録を留めることがあまりに少ない。出世にも名誉にも比較的淡白な人とみえて、１９２８年には侯爵の家督を弟の三男利武（三熊）に譲って隠居し、１９４５年の終戦まで長生きしている。享年８６歳。因みに歴史家大久保利謙氏は弟･利武の長男。
（２０１５・３・６　）

６４　牧野伸熊（伸顕）（まきの　のぶくま）1861 - 1945　鹿児島　１１歳　留学生

昭和天皇の信頼厚き、オールド・リベラリスト　　伯爵

牧野伸顕（まきの　のぶあき）は大久保利通の次男に生れ、生後間もなく利通の義理の従兄弟にあたる牧野吉之丞の養子となり、１８６３年に吉之丞が新潟で戦死したため、牧野家を継ぎ、大久保家で育った。１１歳で父と兄・大久保利和と共に岩倉使節団に加わり渡米し、フィラデルフィアのマンチュア・アカデミーに留学、１８７４年に帰国し開成学校（後の東京帝国大学）に入学する。１８８０年、東京大学を中退して外務省に入省。ロンドン大使館に赴任し、憲法調査のため渡欧していた伊藤博文と知り合う。帰国後、太政官権小書記官、法制局参事官、兵庫県大書記官、黒田清隆首相秘書官、福井県大書記官、茨城県知事、文部次官、在イタリア公使、オーストリア公使等歴任した。太政官権小書記官時代、伊藤博文に随行し北京にて伊藤と李鴻章との駆け引きを経験する。

オーストリア公使時代には、日本とギリシャとの通商条約締結、ロシアとの戦争を見越した情報宣伝操作、第一次大戦後の君主国の動向の調査などにあたる。ヨーロッパにおける黄禍論の広がり防止に努め、イギリス王室外交の有効性に注目している。

第一次西園寺内閣で文部大臣を務め、義務教育の年限を４年から６年に延長し、美術展覧会・文展を開催。第二次西園寺内閣では農商務大臣。さらに枢密顧問官を経て、第一次山本内閣で外務大臣となる。１９１９（大正１０年）第一次世界大戦後のパリ講和会議に次席全権大使として参加し、首席西園寺や随行近衛文麿、娘婿吉田茂の前で、実質的采配を振るった。人種的差別撤廃を提案したのもこの会議である。１９２１年宮中某重大事件の後を受けて宮内大臣に就任する。更に１９２５年に内大臣となり、１９３５年の辞任まで、１５年間も天皇の側近として皇太子の洋行、摂政設置、皇太子結婚や病弱となった元老の松方正義や西園寺公望に代り、昭和天皇の相談役に徹した。そのこともあり、１９３６年（昭和１１年）の二・二六事件では、陸軍青年将校より、西園寺、斉藤内大臣、鈴木侍従長とともに牧野も「君側の奸臣」として湯河原の旅館で襲撃されたが、孫麻生和子（吉田茂の娘）の機転で窮地を脱した。男爵、子爵、伯爵と登り詰め、１９４９年病気で死去に伴い、従一位を叙せられる。妻は三島通庸の次女・峰子で孫には、吉田健一、麻生和子，武見英子（武見太郎の妻）の等の著名人が多い。

（２０１５・３・１０　）

６５　岩下長十郎（いわした　ちょうじゅうろう）1853 - 1880　鹿児島　１９歳

岩倉使節団の二神童のひとり、もう一人は山口俊太郎（9 歳）

父親の岩下方平（みちひらー通称・佐次右衛門　1827 - 1900）は、薩英戦争の和平交渉の正使を務め、１８６５年鹿児島藩家老となる。１８６７年のパリ万博では「日本薩摩琉球太守政府」使節団長として藩士９人を率いて参加した。その中に、息子の岩下長十郎もいた。使節団はパリ万博の半ばで帰国の途につくが、中村博愛（宗謙）、新納武之助と岩下長十郎は後に残って、フブール氏に師事、普通学など学ぶ。鳥羽伏見の戦いが始まったのを聞いて中村博愛らと明治元年に帰国するが、１８６９年１２月３０日前田正名、太田市之進（徳三郎、長州）等と共に日本を発って、再びパリへ向かう。後に、大山巌が西郷従道の欧米巡視と入れ違いで普仏戦争を観戦のために渡欧した時、パリで前田正名、岩下長十郎、渡六之介（正元）、新納次郎四郎と会っている。

岩下長十郎が岩倉使節団に加わったのは、大久保利通の従者としてで、大久保に同行した嫡男・大久保彦之進（利和、１３歳）と次男・牧野伸熊（伸顕、１１歳）の通訳として選んだが、大久保兄弟とはアメリカで分れた。米国で兵部省理事官の山田顕義が、長十郎を兵部省に所属・随行させて、使節団に先行してパリに入り軍事調査に当たることになる。岩倉使節団に二神童あり、一人は山口俊太郎（９歳、副使・山口尚芳長男）で、もう一人が岩下長十郎と言われた。語学力が抜群であった。明治６年に帰国すると、陸軍砲兵大尉となったが、フランス語の坦能さを買われて、司法省でのボアソナードの司法講義の通訳も務めている。前年司法省随行員として、パリ入りした井上毅がボアソナードを外国人お雇いに要請し、その時パリでボアソナードの講義を鶴田皓, 名村泰蔵、川路利良、今村和郎らと聴講するが、その通訳が岩下であった。明治１０年、陸軍の競走馬の生産、育成に関わった記録がある。霞信彦氏『矩を踰えて』ー明治法制断章によれば、彼は『陸軍刑法』の作成メンバーに加わり,「異色の陸軍刑法編纂官」「法典近代化の一端を担った人物」として評価されている。だが彼は、その完成を見ずに２８歳で亡くなっている。死亡当時の新聞報道によれば、明治１３年８月１０日横浜のスイス時計商の夜会に招かれ、某国人と連れだって海岸に行き、裸になって「我が水泳を見せ申さん」と言って海に入り、そのまま、翌日死体で上がったという。妻と幼子を残して、悲劇の最後であった。妻・類は東郷平八郎の長兄東郷実豨の娘で、海江田信義の妹・勢似の娘である。息子の家一（かいち、1879 - 1961）は子爵となり、丸ノ内ホテル、大和ホテルの支配人を務め、逗子なぎさホテルを創設した。

（２０・３・６　『郎女迷迷日録』ー幕末東西、岩下長十郎の死）

６６　山縣伊（亥）三郎（やまがた　いさぶろう）1858 - 1927　山口　１５歳

朝鮮総督府政務総監の山縣有朋の養継嗣、文人でもある

山縣伊三郎は、萩の下級武士勝津兼亮と山縣有朋の姉・寿子との間に次男として生まれる。山縣有朋に継嗣がなかったため、叔父山縣有朋の養子となる。妻は加藤弘之の娘の隆子。息子には有道、三郎と養子の有光がいる。

岩倉使節団には副使・伊藤博文の従者として、高島米八（13）と共に加わり、ドイツに留学する。外務省翻訳見習となり、ベルリン公使館に勤務して、帰国後は太政官法制局参事官を経て、内務省から愛知県、東京府書記官、そして徳島県知事、三重県知事、地方長官､内務次官を歴任する。１９０６年に第一次西園寺内閣で逓信大臣として入閣。鉄道国有化を進める。１９０８年に逓信大臣辞任後貴族院議員に勅選される。明治４３年（1910 年）寺内正毅・朝鮮総督のもと朝鮮副統監となり、ハルピンでの伊藤博文暗殺を機に、韓国併合を挙行した同年１０月から、大正８年（1919 年）８月まで朝鮮総督府政務総監を長く務め韓国支配の確立に尽力する。その間の、大正５年には寺内内閣が成立し、寺内の後任総督に長谷川好道（長州閥）が総督となり、山縣有朋（精神的な院政）、寺内正毅、長谷川好道らの長州閥による武断統治と非難され、大正８年に三・一朝鮮独立運動が起こる。この危機は伊三郎の采配もあって何とか乗り切った。これを機に、時の原敬内閣は比較的穏健な山縣伊三郎を文官朝鮮総督にしようと画策したが、父親の有朋の存在と、所詮長州閥の一角との見方もあって実現せず、海軍大将の斉藤実が長谷川総督の後任となった。その後、朝鮮では文化政治に傾くが、１９４５年の終戦まで独立抵抗運動は断続的に続くことになる。朝鮮総督府政務総監を辞任あとの伊三郎は１９２２年枢密顧問官。１９２５年には答礼使として、仏領インドシナに派遣され、関税問題など日仏間の国交に関わった。大正１１年、義父有朋が８１歳で崩じると公爵家を継ぐが、後に息子の山縣有道が継承する。養子の有光は分家して、山縣男爵家を立てた。

山縣伊三郎は、風雅風流の道に通じ、特に蘭画を能くし、また尺八も巧みであった。素空の雅号で、『素空公墨蘭画存』『風雲集』『風雲集拾遺・年々詠草』『常盤会選歌』などを残し、徳富猪一郎の『素空山県公伝』がある。

平成８年に肥薩線（人吉・吉松間）で、『いさぶろう号』と『しんぺい号』の列車がお目見えした。山縣伊三郎が逓信大臣（電信、郵便と鉄道も管掌）、後藤新平が国鉄総裁のとき肥薩線が開業したことに由来して、ふたりの名前を冠し記念号としたと言う。

（２０１５・３・９　）

６７　鍋島直大（なべしま　なおひろ）1846 - 1921　佐賀　２６歳　留学生

最後の佐賀藩藩主　　天皇の側近となり新政府に貢献

佐賀藩１０代藩主・鍋島斉正（直正＝閑叟）の次男。佐賀藩１１代（最後の）藩主。幼名・直縄（なおただ)、将軍・徳川家茂の偏諱を冠し、茂実（もちざね）そして、維新後、直大と称す。

１８６１年に父･閑叟の隠居により１６歳で佐賀藩主を襲封すると､藩政改革に努め、藩内の殖産をすすめてパリ万博に有田焼を出品し、軍制改革、海軍創設を説き、倹約を実行した。明治元年３月、天保山沖で旗艦「電流丸」を指揮し、我が国初の「観艦式」を挙行。戊辰戦争では佐賀藩兵を率いて指揮を執り，上野戦争や各地を転戦して下総の鎮撫府総督に任命された。維新後は、議定職、外国事務局権補、横浜裁判所副総裁、江戸開市取扱いを歴任するが、明治４年１月に久米邦武、百武安太郎らを随行して留学のため、横浜まで来たところで鍋島閑叟の死去に遭い延期されて、結局同年１１月の岩倉使節団に佐賀藩の田中永昌（覚太夫)、松村文郎（文亮)、百武安太郎（兼行）らと参加することになる。使節団とはワシントンで分かれて、先にロンドンへ向かい、在英中の佐賀出身者に迎えられる。ロンドンではブルースという医者の家に寄宿しながら、オックスフォード大でプロートン博士について文学研究し､使節団がパリに来たときにパリ留学中の弟・鍋島直柔と再会し、使節団と合流し欧州各国を回覧し、ウィーンでは同郷の佐野常民が副総裁を務める万博を見物し、シーボルトとも会っている。江藤新平の佐賀の乱の勃発で、一旦帰国するが乱が終息すると「西洋風の貴族風を学ぶ」為、胤子夫人を伴って再渡英して、英国中心に各地を歴遊し、プリンス・ナベシマとして社交界で活躍、明治１１年帰国する。翌年外務省御用掛となり、来日のドイツ皇族・イタリア王族及びグラント米元大統領の接伴掛を務め､妻と共に鹿鳴館の舞踏練習責任者など務める。明治１３年イタリア王国特命全権公使に赴任、明治１５年帰国。元老院議官・式部頭､宮中顧問官。貴族院議員を歴任､明治天皇､大正天皇の信任も厚くその側近として、天皇に代り祭礼への代拝十数回､≪神のような人柄≫と言わしめ､西洋文明のみならず、神道や日本文化にも造詣が深く、皇典講究所所長も永く（1911-1918）勤めた。従一位勲一等侯爵。

次女・伊都子は梨本宮守正王妃。その娘・方子は朝鮮李朝王世子李垠の妃李方子。四女・信子の孫・勢津子は秩父宮雍仁親王妃と皇室との縁も深い。

（２０１５・３・２３　百武兼行研究―中村幸子、他）

６８　松村文亮（文郎）（まつむら　ふみすけ）1840-1896　佐賀　３２歳　留学生

普仏戦争観戦団と岩倉使節団連続渡欧、軍艦春日艦長

父は佐賀藩の金丸文雅で、兄は母の出身の中牟田家に養子に入った中牟田倉之助海軍中将。弟は多々良惣五郎海軍中尉で海軍一家である。松村に改姓した由来は分からない。兄と共に長崎海軍伝習所で航海術を学び、明治元年上海に航海し、佐賀藩の三重津海軍学所で航海術を教える。

明治３年普仏戦争観戦のミッションが組まれ、大山弥助（巌）、品川弥次郎、池田弥一、板垣退助、中浜万次郎（通訳）の五人が選ばれたが、板垣が藩政で行けなくなり、土佐藩の林有造が代理となり、更に長州藩から有地品之允、佐賀藩の松村文亮が加わり七名となった。一行は米国経由、イギリス、ドイツ、フランスへ向かい、途中で大原礼之助（吉原重俊）ら４名が加わり、１１名で戦場を一カ月近く見て回ってパリに入り、そこでパリコンミューンを見た留学生の前田正名、岩下長十郎、渡六之助、太田徳三郎，新納次郎四郎（武之助）などとコンミューンの生々しい見聞を聞き出している。

松村は帰国後、再び岩倉使節団の山田顕義兵部省理事官一行に加わり、原田一道、富永冬樹（田邊太一随行）、岩下長十郎らと共に、１８７１年に横浜を発ち、米国ワシントンで岩倉一行と別れて、フィラデルフィアの海軍施設を見学後、渡仏。パリを中心に、オランダ、ベルギー、ローザンヌ、ブルガリア、ロシア等欧州各国で軍制を調査・視察して戻っている。フランスでは、再び、軍事留学生の渡正元、太田徳三郎の協力を得ている。ウィーン万博にも立ち寄り、１８７３年５月、マルセーユ港から帰国の途についた。帰国後は、海軍少佐となり、提督府に出仕し、軍艦春日の艦長など務めている。

（２０１５・３・２４　　ウィーンフィルを最初に聞いた日本人ＨＰ，パリコンミューンを見た日本人―宮本孝　他）

６９　百武兼行（安太郎）（ひゃくたけ　かねゆき）1842-1884　佐賀　２９歳

鍋島御曹司と三回渡欧し、西洋油絵を研究した先駆者

百武兼行は佐賀藩士百武兼貞の次男として佐賀城下に生れる。幼名・安太郎。竜造寺氏に仕えた戦国武将の百武賢兼の直系の子孫で、父兼貞は佐賀藩京都留守居・有田焼代官など務めて、久米邦武の父親と同様な役職についている。有田にゴットフリード・ワグネルを招くなど磁器製法の改良に尽力したのも父の兼貞である。

８歳で鍋島直正（閑叟）から、嫡男・直大のお相手役に選ばれ、直大からも兄のように慕われた。岩倉使節団では鍋島直大の後見役として参加、米国を経てロンドンではオックスフォード大学に入学、直大は文学を、百武は経済学を学ぶ。一旦直大と共に帰国するが、１８７４年再び一緒に渡英し、直大夫人の胤子の油絵稽古のお相手として、英国画家リチャードソンから風景画を学び、１８７６年にはロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ展覧会で入選する。１８７８年に鍋島直大夫妻が帰国すると、才能を認めた鍋島の命でパリに留まり本格的に洋画習得に努め、美術学校でレオン・ボナに師事する。特に人物画を学ぶ。１８７９年にパリから帰国するが、駐イタリア公使となった鍋島直大に再度随行してローマに赴き、外務書記官の公務の傍ら王立美術学校名誉教授チェーザレ・マッカリの指導を受ける。１８８１年の「臥裸婦」は日本人による最初の油絵と言われる。

１８８２年に帰国、農商務省に出仕するが、間もなく病を得て佐賀に戻り二年後４２歳で病没する。代表作に「バーナード城」「母と子」「マンドリンを持つ少女」「臥裸婦」などがある。明治期の洋画界の先駆者でありながら役人でもあり、帰国後すぐに亡くなって影響力が少なかったこともあり、今まで評価がされてこなかった。日本から西洋画の留学生が増えていくのは１８７７年以降であり、西洋画の受容や、西洋的なものの見方、考え方の西洋視覚の移入が本格的に始まる前のことである。久米邦武の息子が、画家になったのもこの同郷の先輩の無形の影響も考えられる。

（２０１５・３・２５　『百武兼行研究』－中村幸子、他）

７０　吉川重吉（きっかわ　ちょうきち）1860‐1915　岩国　１３歳　留学生

岩国藩主の子、１３歳で渡米、ハーバード大学に学ぶ　男爵

毛利家の支藩岩国藩主・吉川経幹の次男。兄は、岩国藩最後の藩主・吉川経健。
１８６３年毛利敬親の猶子となる。１２歳で東京開成学校に学ぶ。
岩国藩は、明治４年５月に英国語語学所を設けて英人・ステーベンスを教師として開校するが、同年岩倉使節団の派遣を聞いて、１３歳の吉川重吉を藩医師・土居静軒と田中貞吉を随行にして留学生として参加させた。重吉は福岡藩留学生の黒田長知、金子堅太郎、団琢磨主従と共にボストンに赴き、ライス・グランマー校に入学（1872‐75）、更にチョンシー・ホール校（1875‐79）に基礎を学び、遂にハーバード大学に入学、バチェラー・オブ・アーツを取得して卒業する（1879‐1883）。卒業後はヨーロッパを旅行し、イギリス、スコットランド、オランダ、ドイツ、スイス、フランス、イタリアを半年間遊覧して帰国するが、日本語をすっかり忘れており、しばらく漢文、国文を学ぶ。明治１７年（1884）井上馨の斡旋で、外務省に入省し、井上外務卿に付いて条約改正や京城派遣に随行する。１８８７年にはベルリン公使館二等書記官を拝命し、ベルリン公使赴任の西園寺公望と同船で渡欧、共にローマに立ち寄り、法王・レオ１３世に謁見する。ベルリンでは、ヴィルヘルム皇帝、ビスマルク帝相、モルトケ将軍らと謁見、会見もしている。ヴィルヘルム崩御後の１８９０年に職を辞して、ハイデルベルグ大学に遊学するが、家令で師でもあった下蓮城の訃報を聞いて急遽帰国する。帰国後は貴族院議員として活動する。１９１０年に建築家のジェームズ・ガーディナーによって自宅を建築。１９１５年に南洋協会の設立に参加、副会頭になったが、同年に死去。その遺志によって岩国徴古館が建設される。従三位勲三等。　侯爵小村寿太郎、子爵金子堅太郎、男爵目賀田種太郎らとハーバード倶楽部創設、ハーバード大学に日本文明講座開設に貢献。『家憲』を立て、吉川、毛利家の団結と地域密着の精神を広めるなど、米国ニューイングランドの寄宿先の清教徒に学んで、家族を大切にし、田園に生活するおだやかな生き方にこだわった一生だったようだ。

明治２４年分家して吉川家を継ぎ、父・吉川経幹の勲功により男爵に任ぜられる。

３４歳の晩婚で、西園寺公望の妹の福子（とみ子）と子爵加藤康秋を両親とする寿賀子と結婚、二男二女を得る。長男・吉川重国は宮内庁式部職として、皇后の教育係を務め、長女・英子は原田一道の孫・原田熊雄に嫁す。次女・春子は木戸孝允の家系の和田小六に嫁し、その子・正子は都留重人（経済学者）と結婚する。三女・幸子は岩田豊雄（作家:獅子文六）と結婚するなど吉川重吉の子孫は華麗な家系を形成することになる。

（２０１５・３・１９『吉川重吉自叙伝』―尚友ブックレット２５）

７１　黒田長知（くろだ　ながとも）1839-1902　福岡　３４歳　留学生

人生の達人　知藩事から悠々の隠居生活へ

天保９年伊勢津藩主・藤堂高猷（たかゆき）の次男として江戸に生まれる。1848 年福岡藩主黒田斉溥（長溥）の養嗣子となり、黒田慶賛（よしすけ）を名乗る。

文久３年８月の政変後、病の斉溥に代って上京し、長州藩の赦免と公武合体を朝廷・幕府に訴えるなどの斡旋活動に奔走。文久４年（1864）春、帰国の途上に小郡で毛利世子と会見し、毛利親子の朝廷及び幕府への謝罪を勧告し、あわせて長州と朝幕との斡旋を約し、政変で長州へ逃亡した公家７人の免罪・復位も約したが、長州が直後に禁門の変を起こし、第一次長州征伐となり、ふいになってしまった。しかし、長州藩の責任者の切腹で、一応の終息を見ると、公家５人は（７人のうち一人は死去、一人は脱走）福岡藩へ移転して遷座は曲がりながらも実現する。慶応２年（1866）の長州再征後、上京し二条城で国事意見を開陳するなどの活躍をする。

明治２年（1869）２月斉溥（改め長溥）が隠居して、第１２代福岡藩主を継いで、黒田長知と改めるが、４ケ月後の６月には版籍奉還で福岡藩知事に任命される。

明治４年（1871）、福岡藩は幕末以来の財政難と戊辰戦争の出兵などの出費が重なり、打開策として太政官札と金銀貨贋造したのが、日田知藩事の松方正義の告発で発覚し、当時は他藩でも同様な不正はあったが、見せしめのために長知は免職、謹慎させられた。後任知藩事は、長男の黒田長成ではなく、有栖川宮熾仁親王が任命されたが、１２日後には廃藩置県を迎える。黒田一家は、旧藩士や領民に見送られて、東京の赤坂中屋敷に移転するが、そこへ岩倉使節団派遣の話があり、旧藩士の金子堅太郎と団琢磨を随行にして留学生として参画する。帰国後の明治１１年には隠居して、長男の黒田長成に家督を譲る。明治１７年には号を如淵と称し、元々文学肌であった為、書や文学、絵、囲碁、将棋などを嗜み、井上文雄・本居豊頴の門人になり数々の書を残す。若い頃には儒学を佐藤一斎から、書を市川米庵に学んでいる。著書に『淵の玉藻』がある。また能楽を好み、幕末で困窮していた多くの能楽師たちを援助した。中でも旧福岡藩お抱えの喜多流能楽師シテ方の梅津只円や、その本家家元の十四世喜多六平太を重用し、自らも能を舞い謡った。明治３５年、６５歳で永眠するが、正室の他、側室が６名もいたので結構、粋な人生を送った人と言える。息子の黒田長成は、１２歳で家督を継ぎ、英国ケンブリッジ大学へ留学、貴族院議員として、貴族院副議長を３０年間務めるなど、従一位、勲一等旭日桐花大授章の侯爵で、配偶者は侯爵島津忠義の娘・島津清子である。

（２０１５・３・２８　）

７２　金子堅太郎（かねこ　けんたろう）　1853-1942　福岡　１９歳　留学生

生涯日米の友好のために尽くした、自称憲法の番人。

ペリー来航の嘉永６年に、福岡藩士勘定所附・金子清蔵直道の長男として生れる。幼名は徳太郎。万延元年、金山和蔵、正木昌陽に師事し、漢学修業する。文久３年藩校・修猷館に学ぶ。慶応４年、父・清蔵を亡くし、家督を相続するが、清蔵は一代限りの生涯士分であったため、士籍を失うが、編入した銃手組で昇進して銃手組の株を購入し、４人扶持１２石を得る。明治維新後、修猷館での成績優秀で、永代士分に列せられ、家老から秋月藩や江戸遊学を命ぜられる。明治４年の岩倉使節団には藩主・黒田長知の随行員となり、団琢磨と共に米国留学生となる。ボストンのライス小学校に４年生で入学、卒業生代表演説をして、中学校２年生に編入、中途退学の上、明治９年（1876)、ハーバード大学へ入学、小村寿太郎と同宿で勉学に励む。学外では、著名な政治家・議員・文学者・哲学者・ジャーナリストと交際、大学ＯＢのセオドア・ルーズベルトと後に知遇を得る。明治１１年法学士の学位を得て卒業して帰国する。帰国後は二年ほど、都市民権政社の社員となり、英語教師などしながら米英法制度、陪審員制度、憲法試案など論じつつ、民権運動を行う。明治１３年（1880）に結婚し、元老院に出仕する。元老院副議長の佐々木高行から、ルソー的自由民権派に対抗する保守漸進の理論がないかを問われて、大学時代の愛読書エドマンド・バークの『フランス革命の省察』を紹介、それが元田永孚の目に留まり、明治天皇に奉呈され、参議・山田顕義との連続講義へと展開されて、その後の躍進に繋がる。
元老院総理秘書官、太政官権大書記官兼元老院大書記官、制度取調御用掛、枢密院書記官兼議長秘書を経て、内閣総理大臣秘書官として、伊藤博文のもとで井上毅、伊東巳代治らとともに大日本帝国憲法・皇室典範、諸法典の起草に関わり、男爵を綬爵。

明治２２・２３年の欧米諸国視察後、日本法律学校（日本大学の前身）初代校長に就任。貴族院勅撰議員、初代貴族院書記官長を歴任し、国際公法学会会員としてジュネーヴでの国際会議出席。次いで、第二次伊藤内閣の農商務次官、第三次伊藤内閣の農商務大臣、第四次伊藤内閣の司法大臣を歴任する。１９０４年日露戦争が勃発すると、伊藤博文枢密院議長の要請で、セオドア・ルーズベルト米大統領に接近し、日露戦争を有利に進める広報外交の一翼を担う。さらにポーツマス会議で賠償金や樺太割譲問題で日露の交渉が暗礁に乗り上げると、外相小村寿太郎全権の依頼で、再びルーズベルトに会見してその援助を求め、講和の成立に貢献した。晩年は、枢密顧問官や日本大博覧会会長、日本速記会会長、語学協会総裁、東京大博覧会会長など歴任しつつ、『明治天皇紀』編纂局総裁、維新史編纂会総裁、帝室編纂局総裁などに活躍。子爵、伯爵・勲一等旭日桐

花大綬章を受ける。米友協会会長、日米協会会長、日米同志会会長も務めた。
（２０１５・３・３０　）

７３　団　琢磨（だん　たくま）1858-1932　福岡　１４歳　留学生

三井財閥の総師、日経連・日本工業倶楽部創始。団伊玖磨の祖父。

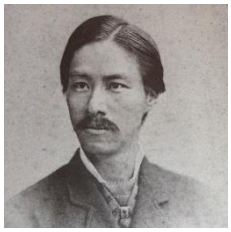
安政５年（1858）福岡藩士馬回役神尾宅之丞の四男として生まれる。幼名:駒吉。１２歳の時、藩の勘定奉行・団尚静の養子となり、藩校・修猷館に学ぶ。岩倉使節団に藩主・黒田長知の随行で参加し、米国留学生となる。明治１１年、マサチューセッツ工科大学鉱山学科を卒業・帰国する。一緒に渡米した金子はハーバード大学へ進むが、その後も二人の交友は続き、後に金子の妹芳子と結婚してその義弟となる。帰国後は、大阪専門学校（旧制第三高等学校の前身）助教授、次いで東京大学理学部助教授となり、工学・天文学などを教える。明治１７年（1884）工部省に移り、鉱山局次席、更に三池鉱山局技師となる。採炭技術の習得のために渡欧し、明治２１年に三池鉱山が政府から三井に売却された後はそのまま三井に移り、三井三池炭鉱社事務長に就任する。

三大工事と言われる三池港の築港、三池鉄道の敷設、大牟田川の浚渫を行い、英国で習得したポンプ技術で、難問の排水問題を解決した。明治２６年三井鉱山合資会社専務理事となり、明治３２年には工学博士号を受ける。明治４２年、三井鉱山会長となる。このころ、団の手腕により三井鉱山の利益は三井銀行を追いぬいて三井物産と肩を並べるようになり、「三井のドル箱」と言われた三池が三井財閥形成の原動力となった。

こうして団は三井鉱山を背景に三井の中で発言力を強め、大３年（1914）には益田孝の後任として三井合名会社理事長に就任し、三井財閥の総師となる。大正６年、日本工業倶楽部を設立し初代理事長に就任する。大正１１年、井上準之助と日本経済聯盟会（日本経済団体連合会の前身）を設立し、翌年に同理事長、昭和３年には同会長となって、名実ともに日本経済界の旗振り役を果たす。同年、男爵を綬爵。

しかし昭和金融恐慌の際、三井がドルを買い占めたことを批判され、財閥に対する非難の矢面に立たされ、昭和７年（1932）、東京日本橋の三越寄り三井本館入口で血盟団の菱沼五郎に狙撃され、暗殺された。平成４年、関勉によって発見された小惑星に「団琢磨」と命名された。作曲家の団伊玖磨は孫にあたる。
（２０１５・４・１　）

７４　江川英武（えがわ　ひでたけ）1853-1933　韮山　１９歳　留学生



米国大学卒業後、官に務めるも、悠々自適の人生をおくる

江川英龍（坦庵）の五男として伊豆・韮山に生れる。安政２年（1855）に父が亡くなり、家督は兄の江川英敏が継いだが、７年後の文久２年（1862）に兄も若くして亡くなったので、英武がわずか１０歳にして家督を継承して、江川家第３８代当主・韮山代官となり、代々の江川太郎左衛門を名乗った。その後、鉄砲方や講武所教授方にも任命された。江川家は伊豆、相模、駿河、武蔵、甲斐等天領５万４千石（26 万石相当）を支配する代官で、父坦庵は、佐久間象山、桂小五郎、橋本左内、大槻盤渓、黒田清隆、肥田浜五郎、大鳥圭介、宇都宮三郎、渡辺洪基などを門下生として芝新銀座の江川塾（塾幹事：柏木忠俊とその養嗣子・柏木敏三郎）で砲術などを教えた。日本最初の活字印刷物は１８６０年に、この塾で発行された『軍事砲軍操法』『歩兵制律』『築城典刑』と言われる。それまでは写本と版木に頼っていた。

英武は、慶応４年（1868）の戊辰戦争で、早々に明治政府側に恭順の意を示し、飯能では渋沢成一郎ら振武軍を敗走させ、箱根戦争に参画し協力して旧領を安堵された。明治２年（1869）には韮山県知事となる。明治４年に兵部省の命を受け、岩倉使節団と共に留学生として渡米する。ニューヨーク州ハイランド・フォールズ中学校（級長となる）から、ピークスキル兵学校に進み、明治７年に帰国命令が出たが、自費留学生として残留し、明治８年ペンシルベニア州ラファイエット大学へ入学して、土木工学を修めて、明治１２年に卒業し帰国する。留学中は江川家手代の森田留蔵と生活を共にしている。帰国後、畜産業を奨励して、明治１４年桂谷牧場、明治１６年川口牧場を開設しながら、内務省、大蔵省に奉職、造幣局東京出張所長を最後に退職する。薩長閥の新政府になじめなかったようだ。退職後の明治年には韮山で、町村立伊豆学校から私立伊豆学校の校長として、英語教科書による英語教育や柔道教育（富田常次郎を講師として招聘）に力を入れたが、次第に経営難となり、数年後校長を辞した。

米国留学中に、米国人の宗教観に触れて、熱心な日蓮宗徒となり、やがて娘婿の山田三良（帝国学士院長）が創設した法華会に繋がる。法華会の熱心な会員には、石橋湛山、新村出、土光敏夫、諸橋徹次、五島昇、加藤高明、姉崎正治、辰野金吾などがいる。

書画に長じ、号は対岳亭、春緑樵夫，翫古斎（がんこさい）、余霞楼（よかろう）、免毒斎（めんどくさい）と人柄が偲ばれる。『翫古斎詩集』江川文庫に諸資料を残す。

（２０１５・３・２９　江川家の至宝　50-江川文庫、）

７５　森田忠毅（留蔵）（もりた　ただたけ）1844-1917　韮山　28　留学生

咸臨丸、岩倉使節団、そして韮山で牧羊経営へ

壬生藩士斉藤佐左衛門（すけざえもん）の四男として１８４４年に生れた斉藤留蔵は安政２年（1855）１１歳で幕府代官兼鉄砲方江川太郎左衛門の塾に実兄・平慎三郎（友平栄の養子）と共に入門した。そこで、砲術、漢書、蘭学を学び、韮山代官所書役見習いに抜擢され、洋式調練を教授するため砲術教授方岩島源八郎、森田貞吉の助手として、京都などへ出張。安政６年、再び江川塾へ戻り、１８６０年１月、１６歳で咸臨丸の遣米随行使節団一行に加わり、その記録を『亜行新書』（日記）に残した。これによると軍艦奉行の木村摂津守喜毅と艦長勝海舟の折り合いが悪く、且つ二人とも船酔いでまったく航海には全く役に立たずで、咸臨丸に同乗を許された座礁の測量船フェニモア・クーパー号の船長ブルック大尉と１０名の船員が操船を支援したこと、日本人でまともだったのは中浜万次郎、小野友五郎、浜口興右衛門の三人のみであったことが記されている。咸臨丸帰国後の文久元年（1861）留蔵は軍艦砲術方お雇いとなり、砲術教授方森田貞吉の助手として京都に出張した縁で森田家の養子となる。その後は森田忠毅と名乗る。文久３年鉄砲教授方となり、将軍家茂の上洛の供奉や農兵調練の教官などに働いた。そして、明治４年，旧主江川英武とともに岩倉使節団同行留学生として海軍省から海上砲術研究の命を受けた。忠毅たち留学生１８名はサンフランシスコから目的地ニューヨークに向かった。忠毅はＮＹに到着すると直ちにピークスキル兵学校に入学し海上砲術を研究したが、６か月で退校し、ニューヨークにあるコオーノウル学校に再入学する。然し、明治７年官費留学生廃止にともない帰国命令が出る。自費留学を希望するが許可されず、海軍省を辞任して再び、翌８年自費でフィラデルフィアの学校に入学し、旧主江川英武の随従者を務めながら、牧畜、農業の研究に勤しんだ。明治１０年、フィラデルフィアの学校を退校し、実務に専念し牧畜業務の研究を行い、江川英武と共に１２年に帰国した。帰国後は、森田留蔵と名乗り、翌１３年（1880）伊豆国の有志と我が国初の牧羊場（牧羊社）を経営した。忠毅は、明治政府には仕えることなく、静岡県韮山に留まり、地域産業の近代化に務めた。

（２０１５・３・２６　『壬生のサムライ太平洋を渡る』－2004 パンフレット）

７６　鳥居忠文（とりい　ただふみ）1847-1914　壬生　２５歳　留学生

在米在学 12 年　ハワイで活躍　貴族院議員２４年間の子爵

鳥居忠文の父・従三位下丹波守忠擧は栃木壬生藩藩主として構造改革と財政再建に立ち向かった名君であった。その忠挙の三男として弘化４年（1847）江戸三番町にある鳥居家上屋敷に生れた。忠文は明治元年兄・忠宝の病気を理由に名代として藩政改革（職制、禄制、軍事、財政、教育改革）を行い、明治２年名代として、再び上京して版籍奉還を行った。同年兄・忠宝の養子となって家督を相続し従五位となり、壬生藩知事となる。明治４年７月の廃藩置県にともない藩知事を辞め、同年９月司法中録となった。１０月海外視察のため司法中録を辞任し、１１月司法大輔の佐々木高行理事官の自費随行として岩倉使節宇団同行留学生として渡米する。（森田忠毅が忠文と江川英武の共通随行者）明治１３年（1880）に一旦帰途に就くが、同年再び渡米して、マサチューセッツ州立アーマスト大学及びボストン大学等に学んで、延べ１２年間法律を学んだ。

明治１５年（1882）１０月卒業と同時に帰国し外交官の道を進む。明治１６年外務省御用掛を経て、翌年には華族令公布により子爵を授かる。明治１８年外務省書記官生となり、ハワイ国のホノルル府領事館勤務となる。以降外務官僚として、明治２３年公使館書記官、２４年外務書記官、２５年再び公使館書記官を歴任。２３年の国会開設にあたり、貴族院議員に勅選され、選挙ごとに当選し、大正３年（1914）までの２４年議員生活を送る。明治３０年（1897）には官職を退いた。明治３６年従三位、大正３年正三位、死後:正三位勲三等旭日中綬章子爵。

忠文が最初にハワイ国へ赴任した頃は、ハワイ・日本修好通商条約が結ばれていた。サトウキビ栽培でアジア人の労働移民が盛んで、明治１４年には、日本にハワイ国のカラカウア国王が来日し、明治天皇と会見、移民誘致を要望した時代。ハワイ王国は立憲君主国として、国際的地位を確保するためにアメリカ人官僚を多数起用して西洋化を図ろうとしたのが裏目に出て、米国人の入植者の影響力が増し、米国との合併を目指す白人勢力に押され、明治２４年（1891）ハワイ王朝最後のリリウオカラニ女王が即位したが、２年後には退位させられハワイ王朝は倒された。１８９４年ハワイ共和国成立。１８９７年アメリカ・ハワイ合併条約調印。日本は反対に回ったが、１８９８年には遂に米国に合併された。そんな時期の明治２９年（1896）に、鳥居忠文は、再びハワイ公使館書記官として赴任しているが、同３０年、５１歳で辞任している。子供は男子５人。絵画、骨董、囲碁、謡曲の趣味があった。『諸悪莫作　衆善奉行　自浄其章　是諸仏教　　忠文』の書額がある（２０１５・３・２７　『壬生のサムライ太平洋を渡る』－２００４展覧会パンフレット）

７７　大村純熙（おおむら　すみひろ）1830-1882　大村　４１歳　　留学生

文政１３年（1830）肥前大村藩藩主・大村純昌の八男として玖島城で生まれる。弘化３年（1846）に兄で第１１代藩主である純顕の養子となり、その年に兄が病気で隠居すると、弘化４年に家督を継いで、第１２代大村藩主となる。丹後守を名乗る。号：台山

侍医・尾尾本公同（おもとこうどう）に蘭学を学び、世界の大勢に通じ、文武や学問を奨励した。文久２年には平戸藩と同盟を結んでいる。幕末期、藩内は佐幕派と尊皇派の対立があったが、文久３年に、純熙が長崎総奉行に任じられ、翌年総奉行を辞任して戻ると、藩内の改革派同盟（三十七士）と藩政改革や尊皇倒幕の盟を結び、イギリス式兵制と西洋銃隊編成で討幕軍を結成する。以降、薩摩藩・長州藩などと共に倒幕の中枢藩のひとつとして活躍し、戊辰戦争では東北地方まで出兵した。この功績により、明治２年、賞典禄３万石を与えられた。版籍奉還により、大村藩知事を任命される。

明治３年、藩内に小学校と中学校を設立、奨学制度をもうけるなど育英事業や郷土振興事業に尽力した。同年には一瀬勇三郎を大村藩貢進生として、大学南校（東京大学の前身）へ送り込む。一瀬は法学を勉強し、後に海外留学もしてお雇い外国人ボワソナードの通訳も務め、「法曹界の乃木将軍」と称され、控訴院長を務める大物に育った。

明治４年、版籍奉還で藩知事を辞任すると岩倉使節団の派遣で、松浦恕行（熙行、忠行）と湯川頼次郎を随行に留学生として参加する。留学先は英国となっているが、何を学び、いつ戻ったのかは不明。使節団には、長崎出身の長岡治三郎（物理学者の長岡半太郎の父）、朝永甚次郎（ノーベル物理学者・朝永振一郎の祖父）と共に留学したとウィキペディアに記載されるが、関係は分からない。

大村藩では江戸時代より１８０年掛けて、『郷村記』（領内諸村の地理、歴史、旧跡、伝記、産業などの記録）の編纂を手掛けてきたが、純熙の代でやっと完成している。

上野彦馬撮影による家族写真が残されている。（上掲右端）

（２０１５・４・２　大村市の歴史など参照）

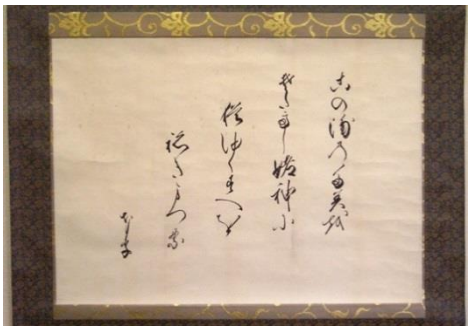
７８　清水谷公考（しみずたに　きんなる）1845-1882　公家　２７歳

初代北海道知事　開拓使　函館戦争の総督

公家・清水谷公正の次男として生まれる。幼いころに出家して比叡山に入るが、嘉永７年（1854）に兄・実睦が没した為、還俗して清水谷家の継嗣となる。安政５年（1858）に従五位下を綬位。文久２年（1862）に侍従となる。慶応４年（1868）戊辰戦争が勃発すると、ロシアの脅威を知り、高野保建と連名で「早急に蝦夷地に鎮撫使を派遣すべし」と建策し、五稜郭に箱館裁判所の設置が決まり総督となる。汽船「華陽丸」で敦賀を発ち、江差に上陸して差姥神大神宮に詣で、「この浦の民を育てし姥神の猶ゆくすえを祈きまつるなり」と献歌している。旧幕府・箱館奉行の杉浦兵庫頭誠より、平和的に引き継ぎを受け、幕府役人も希望者は下僚に加えた。箱館裁判所総督はすぐに箱館府知事と改名される。その年の１０月に、榎本武揚率いる旧幕軍が海上から上陸し、五稜郭を占拠すると一旦、異国船「カガノカミ」で箱館を脱出し、青森に後退し、青森口総督に任命される。その後、陸軍参謀の黒田清隆の作戦が奏功して、清水谷は再び、江差に上陸し、明治２年５月に、旧幕軍の蝦夷地共和国を降伏に追い込む。

箱館戦争終了後、箱館府知事の政務に復帰し、同年７月開拓使が置かれると、開拓使次官を任命されるが、３か月で辞任して、専ら学問に勤しみ、大阪開成所などで研鑽をつみ、明治４年の岩倉使節団の随行留学生として参加、明治８年（1875）の帰国まで、４年間ロシアなど欧州に滞在することになる。帰国して、家督を継ぐが、明治１５年（1882）に死去。従三位を綬位する。その後の家督は、弟の清水谷実英が継いだ。

北海道開拓使は、鍋島直正（初代―1868）、東久世通禧（二代―1869-1871）と黒田清隆（三代―1870-1872）が長官を継いだ。



『雲間雁』（公考）

江差上陸の船の図と献歌　　（2015・4・4　）

７９　坊城俊章（ぼうじょう　としあや）1847-1906　公家　２５歳　留学生

有為転変の人生を送った公家軍人　日記・集成を残す

坊城家は、名家の家格を有する公家。藤原北家観修寺流。小川坊城とも称する。家業は紀伝道と装束．家紋は竹に雀。江戸時代の家禄は１８０石。１８８４年伯爵を綬爵。

坊城俊章は、弘化４年（1847）父：坊城俊克・権大納言の子として生まれる。義父は参議の坊城俊政。第２２代坊城家当主となる。安政４年（1857）従五位上。

元治元年（1864）１７歳で孝明天皇の侍従となる。慶応４年（1868）参与となり、弁事・外国事務局権輔を兼務。その６月に三等陸軍将に転じ、８月旧幕府艦隊の襲来に備え、摂津・泉州防御総督となり、大阪警備にあたる。維新後、明治２年（1869）奥羽按察使（あぜち・施政や民情を巡回視察した）を命ぜられる。明治３年（1870）酒田藩が廃され山形県が置かれると、初代山形県知事を務め、明治政府でも軍務につき戦後処理をした。明治４年岩倉使節団の留学生として参加しドイツ、ロシアなどを遊学し、主として軍事研究をした。

明治７年（1874）帰国。陸軍中尉となり、陸軍戸山学校教官を務める。明治１０年（1877）西南戦争に中隊長として出征、大尉に昇進。その後、近衛都督伝令使となり、日清戦争では大隊長少佐として従軍、常に実戦参加の公家軍人として、華麗なる近衛将校時代を送った。彼は高位高爵にもかかわらず、階級にこだわらず、天皇と皇族の側近として、粛々、淡々としてノーブレス・オブリージェを保った。

日清戦争後の１０年間は貴族院議員を務めた。最終階級は陸軍歩兵中佐で、従二位勲三等瑞宝章、伯爵。

明治初年から明治３８年までの日記・メモなど膨大な『坊城俊章日記・記録集成』（西岡香織編―尚友倶楽部）は、有為転変の人生を送った公家軍人の坊城俊章の生き方を通じ明治史の一側面を伝えるものとして注目されている。

（２０１５・４・５　ネットブログ、他）

８０　武者小路実世（むしゃのこうじ　さねよ）1851-1887　公家　２１歳　留学生

武者小路公共、武者小路実篤の父　日独協会初代会長

武者小路家は藤原北家の支流で閑院流（三条、嵯峨、三条西，園地、西園寺，徳大寺など 20 家）に属する堂上公家の末流。父・武者小路実建（8 代）　母・玉浦。

武者小路実世は、幼名：多嘉丸。９歳で従五位下。１１歳で元服。１３歳で従五位。１７歳で正五位下に昇進した。明治元年には御親政行幸浪花賢所供奉勤仕で、天皇臨席の大阪港観艦式に出仕している。１８歳で勘解由小路の娘・秋子（なる子）と結婚している。３７歳に肺結核で亡くなるまでに８人の子をなしている。五人は早世して、後に三男（実質の長男）・公共（きんとも）が十一代武者小路家を継ぎ、作家で文化勲章の武者小路実篤は、４男（実質次男）である。

岩倉使節団にはドイツ留学生として参加し、アメリカからドイツへ渡り、明治５年１月には着いている。ドイツでは、どこで何を学んだかは記録に残されていない。

明治７年７月に帰国した。ドイツからは法律書、百科全書、ゲーテ、シルレルなどの文学書を持ち帰っている。帰国後の明治９年に天皇臨席の華族会館開館式で開館司計局長として祝辞を述べている。同年に兄で九代の武者小路公香が亡くなり、十代を継ぐ。

九代の公香が日光例弊使として、行列で掛川を通りかかった時、英人・アーネスト・サトーらの一行と出会い、公香の郎党が無礼打ちに及んだが幸い殺害には至らなかった。武者小路側は家僕一人の切腹者を出すことで、国際問題になることを免れている。

明治９年は従来の家禄と賞典禄が廃止され、代わりに「公債証書」が公布された年で、武者小路家は２５４石８斗取りであったが、１万１５４２円公債が交付された。岩倉具視の肝いりで、華族用の第１５国立銀行が創設され、武者小路家は、６７株、６７００円を出資している。因みに、４８４人の出資者中で、出資額順位で３４０位であった。

最高出資者は島津忠義の７６万７２００円であった。それが武者小路家の立ち位置であったといえる。

明治１０年６月から８月にかけての西南戦争の視察に出掛けて、戻って天皇に報告している。明治１４年、熊谷裁判所判事。同年の日本鉄道会社創立発起人に、岩倉具視らと名を連ねている。明治１７年参事院議官補となり、憲法発布の準備に携わる。同年、子爵を綬爵。１８８７年に病死すると、息子の武者小路公共に子爵ごと引き継がれた。公共は東京帝大法学部卒で、外務省に入り、ルーマニア、フィンランド、デンマーク、スエーデンの公使を歴任、更にトルコ大使を経て、駐ドイツ大使の時に日独防共協定を調印。日独協会の初代会長を務めているので、親子二代に亘って、ドイツに縁があった。

（２０１５・４・５　　武者小路実篤の系族―大津山国夫、他）

８１　平田東助（範静）（ひらた　とうすけ）1849-1925　米沢　２３歳　留学生

米沢藩士から長州・山県閥の重鎮へ

嘉永２年（1849）米沢藩医・伊東昇廸の子として生まれ、兄が家を継ぎ、安政３年（1856）に同藩の医師・平田亮伯の養子となる。藩校・興譲館に学び、江戸で古賀謹堂の門をたたく。戊辰戦争で、藩は奥羽越列藩同盟の中心で戦い敗北。その後に、藩命で東京に上り、吉田賢輔に英学を学び、後大学南校に入学する。明治４年に、旧藩校に洋学舎を設置に尽力し、慶応義塾の村道之助、宮内赫助、滝川喜六らを招く。

岩倉使節団にロシア留学生として随行参加するが、ベルリンで青木周蔵、品川弥二郎らの知遇を得て説得され、統一直後のドイツ留学に切り替えた。ベルリン大学で政治学、ハイデルベルグ大学で国際法（日本人初の博士号）、ライプツイヒ大学で商法を習得する。明治９年（1876）帰朝して、内務省御用掛となるが、のち大蔵省に転ずる。

長州藩出身の品川。青木の仲介により、木戸孝允、山縣有朋、伊藤博文ら長州閥の知遇を得て、かつて政府に敵対した米沢藩出身でありながら長州系の官僚として信頼されていく。

ドイツ法学の専門家として大蔵省翻訳課長、少書記官、法制局専務などを歴任。明治１５年（1882）には、憲法調査の為、伊藤の憲法調査団に随伴。病で帰国した後は、内閣制度導入に関わる法制度整備に貢献する。明治２３年（1890）の帝国議会発足時には、貴族院議員に勅選され、枢密院書記官も兼ねる。平田は貴族院内で勅選議員を中心とする会派・茶話会の結成に務め、山縣直系の貴族院官僚派の牙城を築いた。明治３２年（1898）第二次山縣内閣では法制局長官。産業組合法など数々の法案に携わる。第一次桂内閣で農商務大臣、第二次桂内閣で内務大臣を務める。明治４１年（1908）には、日露戦争後の自由主義・社会主義思想の勃興や弛緩した世情を危ぶみ、思想統制政策の戊申詔書の公布を仰ぎ、地方改良政策を推進した。陸軍の桂太郎、児玉源太郎、寺内正毅ら山縣閥に対し、清浦奎吾、田健治郎、大浦兼武ら官僚系山縣閥側近を形成した。明治４３年（1910）大逆事件の内相として、検挙・処刑に関与。事件発生の責任を負って辞表を提出するが明治天皇の慰留で、職に留まる。同年、子爵となり華族に列する。大正に入り、元老院会議で首相に推されたが辞退。以降は閣僚などの表舞台には立たず、貴族院や宮中における山県閥重鎮として、元老に次ぐ影響力を保持する。大正１１年（1922）内大臣に就任し、伯爵となる。大正１４年逗子の別荘で病死。神社合祀令を強固に推進したことでも有名。（２０１５・４・６　）

８２　松崎万長（まつがさき　つむなが）1858-1921　公家　１４歳　留学生

公家　ドイツに学び、明治初期の建築家となる

安政５年に、孝明天皇の侍従長・右京太夫堤哲長の次男として京都・二階町に生れる。公家・甘露寺勝長の養子となる。幼名：延麿、信麿。弟に亀井茲明がいる。

孝明天皇の稚児だったため、慶応３年（1867）、その遺詔により堂上公卿に列した。（孝明天皇の子だったと言う噂もある）同年１１月、松ヶ崎姓を称する。明治２年（1869）３０石３人扶持を賜った。

明治４年岩倉使節団に加わり、ドイツ（当時のプロイセン）に渡り、１８８３年（明治 16 年）から、２年間ヘルマン・エンデ（Hermann Ende- 1829-1907）の講ずるベルリン工科大学で建築学を学ぶ。１８８４年（明治 17 年）に男爵を賜り、同年１２月帰国。　明治１８年（1885）４月、皇居造営事務局御用掛。明治１９年（1886）に内閣臨時建築局工事部長として国会議事堂など官庁集中計画に携わり、留学の経験を生かし、青木周蔵と共同提案でドイツから建築家の師でもあるエンデとヴィルヘルム・ベックマン（Wilhelem Bockmann-1832-1902 ）を招聘するとともに、ベックマンが提案した『ベックマン貸借留学生』の呼びかけに従って、山田信介、加瀬正太郎、鎗田作造、内藤陽三や後に、日本ステンドグラス創始者となる山本辰雄（のちに宇野澤辰雄）など建築家養成と職人たち２１名をドイツへ留学する手助けをする。

明治１９年には、辰野金吾、河井浩蔵、妻木頼黄と共に造家学会（のちの日本建築学会）の創立委員となり、設立に貢献した。この造家学会創立委員会は、同年松崎邸で開催された。　明治２６年、裁判所から資産分散の宣告を受け、明治２９年に爵位を返上した。返上は経済的理由と考えられている。

明治２１年旧青木周蔵那須別邸（国の重要文化財）設計・建設。

明治３４年（1901）仙台に転居し、仙台七十七銀行本店の設計にあたり、１９０３年完成。　明治４０（1907）から、台湾総督府鉄道局に勤務して、台北西門市場（1908），基隆駅（1917）、新竹駅（1913）、大稲埕公学校（1917）、台中公会堂（1918）など台湾での建築実績が圧倒的に多い。

２０１５年東京駅（1914 辰野金吾の建築）と台湾・新竹駅が姉妹駅の関係を結び、その時に松崎万長の名がクローズアップされたのは記憶に新しい。

（２０１５・４・７　）

８３　日下義雄（くさか　よしお）1851-1923　会津　２１歳　留学生

生涯・井上馨に愛され長州閥の一角を成した元会津藩士

会津藩の侍医・石田龍玄の長男に生まれる。農家出身の父は、医学を学び士分に取り立てられ、内科の名医として貧しきものに無銭治療した。旧名：石田五助。弟石田和助は白虎隊で自刃。妻は水野忠精の娘・可明子。

藩校・日新館で学び、鳥羽・伏見の戦いに参戦。会津戦争で、大鳥圭介らと行動し、落城前に会津を脱出し、箱館戦争に加わる。捕虜となり増上寺で謹慎時に、石田義雄と名乗るが、後、井上馨と知り合って長州藩日下家の養子となり、日下義雄となる。

転機は、会津藩の人参御用商人の足立仁十郎を頼って長崎へ行き、そこで会津藩費で医学・法学を学んだドイツ留学から戻ったばかりの小松済治を紹介され、その口利きで井上馨の書生となったことに始まる。大阪英語学校に入学、そこに岩倉使節団派遣の話があり、井上に日参説得して、官費米国留学生に潜り込む。小松も二等書記官で参加。

明治７年に米国より帰国。明治９年井上馨に随行しヨーロッパ視察に出、ロンドンで統計学・経済学を学んで、明治１３年帰国。内務省に勤務、太政官権大書記官、農商務省大書記官、同統計課長を歴任。一等駅逓官となったのち、明治１９年（1886）長崎県令（初の県知事）に就任。当時、長崎・高島炭鉱ではコレラの流行で１５００人に近い死人が出ていた。衛生状態が悪いと考えた日下は感染症対策に、水道事業を計画したが、予算が膨大で反対者が多い中、同郷の北原雅長（会津家老・神保修理の弟）を長崎市長に推薦、当選するとその協力を得て、日本初の水道専用のダム（本河内高部水源地）を明治２４年に完成した。因みに東京の一部に水道が引かれたのは明治３１年である。又、中島川に吉野桜数千本を植えて夜桜名所にし、感染症対策上、土葬を禁じてもいる。

水道完成の前に辞職しているが、県民に惜しまれての盛大な離任と言われる。
尚、長崎へ就任の年に妻を病気で失い、同年清国の水師提督・丁汝昌の北洋艦隊が長崎に修理名目で寄港し、兵士と警官との間に暴動事件が発生し、死傷者を出したが、大きな外交問題にせずに県と新政府（外相・井上馨）と駐日清大使の連携で終息させた。

明治２５年（1892）福島県知事に、同県出身者として初めて就任する。明治２８年には弁務公使。明治３２年に、渋沢栄一らと岩越鉄道会社を設立し、郡山・会津若松間を開通させた。明治３３年には、京城・釜山鉄道創設委員会に参画。長崎・佐世保鉄道にも関与している。実業家として、第一銀行の常務取締役を務め、明治３５年衆議院議員選挙に福島県から当選。通算二期を務める。

（２０１５・４・７　ブログ・長崎を訪れた会津の人々、ほか）

８４　中江篤助（兆民）（なかえ　とくすけ）1847-1901　高知　２５歳　留学生

韜晦、逆説、風刺、めくらましのプリズム人生。君民共治主義者

弘化４年高知城下に生れる。文久元年（1861）父の死去で家督を継ぎ、足軽身分となる。翌年、藩校・文武館開校と共に入門。慶応元年（1865）藩留学生として長崎に行き、フランス語など学び、坂本龍馬の面識を得る。慶応３年、江戸に移るが、居つけず、兵庫が開港すると上方に赴き駐日仏公使ロッシュの通訳を務める。明治になると、再び東京へ出て福地源一郎の日新社塾頭となりフランス語を教え、箕作麟祥の家塾に入門。大学南校助教にもなる。岩倉使節団には大久保利通に直訴して、司法省９等出仕で採用されて、フランスへ渡り、パリ、リヨンに滞在し、西園寺公望と知り合う。

明治７年（1874）帰国して、家塾・仏蘭西学舎を開き、語学、思想史、漢学など教える傍ら、ルソー『社会契約論』の抄訳『民約論』の校訂をなし、民権論を教える。

明治８年（1875）東京外国語学校の校長となるが、徳育教育を巡り、文部省と対立し辞職。元老院副議長の後藤象二郎より同院権少書記官に任命され、調査局翻訳掛や国憲取調掛を兼務し、井上毅らと憲法草案に携わる。この時期、勝海舟、海江田信義、島津久光らと知り合う。明治１０年元老院を辞職後は家塾経営、翻訳業の傍ら、済美黌で漢学修業を続ける。自由民権運動が高まると、明治１４年に西園寺らと『東洋自由新聞』を創刊し主筆を務めるがすぐに廃刊。明治１５年、『民約約解』を刊行。自由党の旗揚げに参画し、党機関紙『自由新聞』の社説掛となり、明治１６年日本出版社を設立。明治１８年結婚。外相・井上馨の条約改正交渉を巡る大同団結運動に参加。明治２０年には、後藤象二郎の農商務大臣辞職を求める封書代筆に関わり、保安条例で東京を追われ、私塾も閉鎖に追い込まれる。明治２１年に大阪で創刊した『東雲新聞』の主筆を務める。明治２２年（1889）、大日本帝国憲法発布の恩赦で追放処分が解除されると、翌年の第一回衆議院議員総選挙に大阪で出馬し、自らを被差別部落民と自称し、一位当選する。民党結成に務め、明治２４年立憲自由党が結党すると、『立憲自由新聞』の主筆を務めたが自由党土佐派の裏切りに怒って、アルコール中毒を理由に辞職した。その後は、北海道・小樽に移り、実業家として活動し、『北門新聞』を創刊し主筆を務めた。札幌で材木業「山林組」を起業。常野鉄道，毛武鉄道の発起人となり、中野清潔社も起こすそのほかにも、群馬で遊郭再設置運動など、虚業的、数々の事業や政治活動を手掛けるが、悉くに失敗している。著作は多数残す。その中でも、『三酔人経綸問答』と、最晩年の『一年有半』『続一年有半』が白眉。生涯、長唄、端唄、三味線を愛す。

（２０１５・４・８　）

８５　永井　繁　（ながい　しげ）1862-1928　静岡　９歳　留学生

日本の音楽教育の草分け。瓜生外吉と結婚。

（写真右：津田梅、アリス・ベーコン、瓜生繁子、大山捨松）

佐渡奉行属役益田孝義（鷹之助）の四女として、江戸に生まれるが、幕府医師永井玄栄（久太郎）の養女となる。開拓使による女子留学生の一人に選ばれ、岩倉使節団に随行してアメリカに留学する。明治５年２月ワシントンに着くと、コネチカット州ニューヘイヴンの歴史家・アボット家に寄宿する。そこで、鳩山和夫（一郎の父）と瓜生外吉と知り合う。明治１１年、中学普通科を卒業。同年９月より、ニューヨーク州のヴァッサー大学（Vassar College）に入学して、音楽科を専攻し、文学、近世国語科も履修し、明治１４年６月に卒業して、同年１０月に帰国した。９歳で留学して１０年滞米したので、帰国した時は「ネコ」くらいしか日本語が分からず、中年になって来日したアメリカ人のような心地がしたと言う。帰国後の明治１５年に、留学中に知り合って、先に帰国していた瓜生外吉（のちの海軍大将、男爵。1857-1937）と結婚した。結婚披露宴は兄の益田孝邸で一年後に行われ、西郷従道、大山巌、渋沢栄一らが出席。余興に、津田梅子、山川捨松、益田栄作（繁子の弟）で、英語劇『ベニスの商人』が演じられた。

明治１５年３月、文部省音楽取調掛に採用される。年俸３６０円で、翌年４２０円に昇給しているので優遇されている。小学校教員の月給が６―１０円の時代である。東京高等女学校を兼務して、さらに月給２０円も追加されている。

明治５年に学制が生まれ、明治１２年にやっと文部省の中に音楽取調掛が誕生して、洋楽教育が緒に就いたばかりであった。明治１３年に、文部省はお雇い外国人の米国人メーソン（Luther Whiting Mason 1818-1896 ）を招いて、明治１３年、ピアノ、英語版バイエル教則本、音譜を持ち込んで、管弦楽法、オルガン、ピアノ調律技術の教授が始まったばかりであった。永井繁（瓜生繁子）は、時宜に遭った貴重な人材として、明治３５年１２月に辞職するまで、近代音楽教育（唱歌）の草分け的存在として、東京音楽学校や女子高等師範学校（当初・東京高等女学校）に務めて、幸田延（1870-1946）、三浦環（1884-1946）や柳兼子（1892-1984）等の教え子を育てた。

教師の傍ら、７人の子供を育てている。ピアノで独奏会を演じた最初の日本人と言われる。三井物産の創立に貢献した男爵：益田孝（小田原の三茶人の一人、鈍翁）は、繁の兄である。

（２０１５・４・１１　　音楽教育の草分け―永井繁子―『ぶん蔵』サイト）

８６　津田　梅（つだ　うめ）　1864-1929　東京　７歳　留学生

日本女子教育の先駆者

津田梅子は幕臣・津田仙の子として、江戸に生まれる。父・仙（1837-1908）はキリスト教三傑（新島襄、中村正直、津田仙）の一人で、農学者。幕末の１８６７年小野友五郎使節団に随行し、福沢諭吉、尺振八らと通訳として渡米。維新後、北海道開拓使の嘱託となり、開拓使次官の黒田清隆が計画の女子留学生派遣に娘を参加させる。最年少の満６歳だった。留学費用は、年一人１０００円、開拓使費用（10 年で 1000 万円）から出費。米国ではジョージタウンで、日本弁務館書記のチャールズ・ランマン夫妻の家に寄宿して、カレジエイト・インスティチュートへ通う。明治６年（1873）キリスト教の洗礼を受ける。明治１１年カレッジエイトを卒業し、私立の女学校であるアーチャー・インスティチュートに進学してラテン語、フランス語、英文学、自然科学、心理学、芸術などを学ぶ。明治１４年（1881）開拓使から帰国命令が出るが、在学中の山川捨松と梅子は延長申請して、明治１５年に卒業して、捨松と一緒に同年１１月帰国する。

帰国したが派遣させた開拓使は廃止されて、日本語能力も通訳が必要なほどで、日本の風習にも不慣れで行く場がない。明治１６年、偶々、井上馨邸での夜会で伊藤博文に会って、伊藤家で英語指導や通訳を務め、一方で下田歌子の私塾で英語を教え、日本語を学ぶ。明治１８年、伊藤博文の推薦で、華族女学校の英語教師に採用され、三年ほど教えるが、米国での友人アリス・ベーコンの薦めで再留学を決意し、明治２２年に再渡米する。フィラデルフィアのリベラル・アーツのブリンマー・カレッジで生物学を専攻する。１年半で修了し、教育教授法を学ぶため、ペンシルベニアのオズウイゴー女子師範学校に入る。一方で、アリス・ベーコンの『日本の女性』出版の手助けをする。

蛙の発生に関する論文を執筆、大学から学究に留まることを薦められたが、明治２５年に帰国して、華族女学校に復帰。明治２５年には明治女学院の講師を、明治３１年には女子高等師範学校の教授も兼務するようになる。やがて、明治３２年より、高等女学校令や私立学校令が公布されると、明治３３年には年俸８００円の官職を辞して、父の仙や、アリス・ベーコン、大山捨松、瓜生（永井）繁子、桜井彦一郎（鴎村）らの助けを得て,「女子英学塾」（津田塾大学の前身）を設立し、塾長となって女子教育に専心する。当初は、生徒１０人に始まる。明治３７年には、社団法人・女子高等専門学校として、394 名に対し、202 名の英語免許を得るほどに貢献するが、健康を損なったこともあり、大正８年には塾長を辞任し、鎌倉の別荘で闘病生活に入り、昭和４年（1929）に、６４歳で死去した。生涯独身を貫いた。勲五等瑞宝章を受章。

（２０１５・４・１１　高原千尋のブログ『暗中模索』）

８７　山川捨松（やまかわ　すてまつ）1860-1919　会津　１２歳　留学生

会津藩の家老の娘、大山巌と結婚「鹿鳴館の貴婦人」となる

山川捨松は会津藩家老山川尚江の末娘・咲子として生まれる。会津戦争では，母姉達と、鶴ヶ城に籠城して戦う。兄に山川浩（陸軍少将、男爵）山川健次郎（東京、京都、九州各帝国大学総長、男爵）がいる。岩倉使節団に留学生で加わるとき、母から「捨てて、帰りを待つ」と捨松と改名される。渡米して、ランマン家に預けられるが、やがて永井繁と共に、ニューヘイヴンのレオナルド・ベーコン牧師家に寄宿する。ヒルハウス高校で大学受験準備の勉強をし、明治１１年、ヴァッサー・カッレジに入学、通常科に編入。２年で学年会会長、明治１５年（1882）卒業式総代論文に「英国の対日外交政策」の演説をする。アメリカ大学卒業初の日本人女性となる。ニューヘイヴン看護婦養成学校に短期入学して、上級看護婦免許を取得して、同年津田梅子と共に帰国する。

津田梅子と同様に、帰国しても明治初期の帰国子女に仕事も、世間の眼も冷たい。永井繁と瓜生外吉の披露宴で、妻を亡くした陸軍卿大山巌に見初められ、薩摩はかつての仇と煩悶するが、最後は周囲の反対を振り切って１８８３年結婚に踏み切る。年齢差１８歳、３人の子持ちを乗り越えての決断であった。大山は捨松が横浜を発って米国留学した翌日に普仏戦争視察のため、欧州に旅立っている。英仏語も堪能で、因縁めいたものもあった。結婚後、一女二男をもうけ夫婦仲は評判になるほどのおしどり夫婦であった。

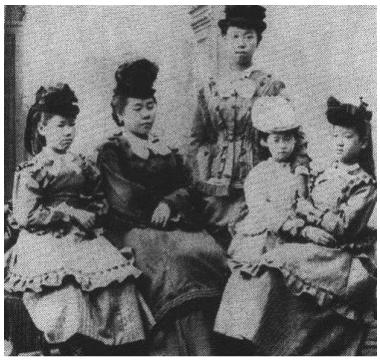
時あたかも、鹿鳴館時代で、外国人との交際はなれたもの。姿かたち、物腰が優雅で社交性があるので、あっという間に鹿鳴館の貴婦人と称されて活躍をする。

鹿鳴館慈善バザーを企画成功させ、日赤篤志看護人会理事など慈善事業に奉仕、日露戦争中は、満州軍総司令官の妻として、国民の士気を高め、銃後を守る活動にも熱心に務めた。更に、津田梅の経営する女子英学塾の顧問として、陰日向なく支援した。

大山巌の死を見送り、アメリカの親友・アリス・ベーコンにも先立たれ、津田梅子の女子英学塾長辞任を見て、大正８年、５９歳の生涯を閉じた。

（２０１５・４・１５　「鹿鳴館の貴婦人」－久野明子）

８８　吉益　亮（よします　りょう）1857-1886　東京　１５歳　留学生



（写真右：永井、上田、吉益、津田、山川）

眼病の為、一年で帰国。女子英学校を創設するがコレラで早世

東京府士族吉益正雄の娘・吉益亮は岩倉使節団の五人の女子留学生に加わって米国に留学する。五人とも幕臣か佐幕藩家臣の子女である。いわば賊軍の子女がなぜ岩倉使節団の女子留学生に参加したのか。夫々に経緯は違うが、皆、親が何とか娘たちを新しい時代の変革の旗手にしたかったのだろう。亮の場合は、父親の吉益正雄は上田悌の父親・上田畯と共に権太丞・黒田清隆のもとで働いていた。明治３年５月に黒田が北海道開拓使次官に転出した。黒田は明治４年１月に、開拓団調査と指導者探しに渡米して、同じ薩摩藩出身で駐米少弁務使としてワシントンに赴任していた森有礼と会って、日本が西洋化するためには、女子教育が必要と意気投合して、半年後の明治４年６月に帰国すると、開拓使の予算（10 年で 1000 万円）からの出費で、女子留学生を募集する提案をして実現にこぎつける。募集したが、１０年間も娘を知らぬ外国に送り込む親は現れず、やっと派遣の１か月前に５人の少女をかき集めた。出発前、昭憲皇太后に拝謁し、「帰国後は女子の模範になるように、奮励勤勉せよ」との訓辞を受ける。

アメリカへの渡航の船上とワシントンへの途上では、福地源一郎と米国駐日公使のデ・ロング夫人が女子留学生の面倒を全面的に見た。福地は上田畯に英語を教えており、文久２年の池田遣欧使節団に、福沢諭吉、上田畯と共に随行している。福澤と小野友五郎使節団に加わった津田仙（梅子の父）も知っていた筈である。

ワシントンで５人を引き渡された森代理公使は、日本弁務使館で雇用していたチャールズ・ランマン夫妻に身柄を託した。吉益亮と津田梅はランマン家に残り、上田悌、山川捨松、永井繁は牧師アポット家に引き取られる。吉益は、１年足らずで眼病をやみ、上田悌とともに、明治５年１０月に帰国する。

帰国後は、築地の海岸女学校で教鞭を取り、明治１９年には、京橋に父親の支援で女子英学校を創設するが、同年、不幸にしてコレラで病死した。

（２０１５・４・１２　ブログ高原千尋・暗中模索　他）

８9 上田　悌（うえだ　てい）1855-1939　　東京 16 歳　　留学生

平凡ながら豊かな人生を歩み長寿をまっとうした女性

上田悌は、岩倉使節団随行・女子留学生の最年長の１６歳だった。悌の父親は旧幕臣の上田畯（友助，東作とも）で、新潟奉行支配並定役に勤務し、１８６２年幕府の遣欧使節団に随行して、普請役として福澤諭吉、福地源一郎らと渡欧している。更に、１８６６年の遣露使節団にも外国奉行支配調役並で随行している。この時は、山川捨松の兄・山川大蔵（浩）も一緒だった。上田悌ら、５人の女子留学生には、ある種の共通点がある。

共に幕臣か賊軍の娘であったこと。もう一つは、身内の親や兄弟が海外経験を持つ海外通であったこと。或は、奇妙な因縁で相互に繋がっていた。山川捨松の兄・浩は上述した。もう一人の兄・健次郎は捨松の出発時米国に留学していた。永井繁の父と兄：益田鷹之助と益田孝は、文久３年の池田遣仏使節団に親子で随行している。同じ使節団にいた乙骨亘（綱二）は、のち上田悌の姉・孝子と結婚し上田家の婿養子となる。因みに、その夫婦の子が「海潮音」の訳者・上田敏である。悌の父：上田畯も上述の如く２度も渡欧している。津田梅の父・仙は、１８６７年幕府が、軍艦購入のために派遣した小野友五郎遣米使節団に通詞として福澤諭吉、尺振八らと随行している。

吉益亮の父親・吉益正雄のみ海外経験はないが、上田畯と共に外務省で開拓使次官へ転出する前の黒田清隆の下で働いていて、一緒に北海道開拓使が募集した女子留学生に娘を応募させたようである。人集めに苦労した黒田の要請があったかもしれない。

維新後の上田畯は外務省に奉職し、明治２年（1869）外務大録として、新潟港開港事務を指揮していた。この年の１０月，官立新潟英学校の教師として、ブラウン教師と、のちにフェリス学院校長となる婦人宣教師のメリー・キグ―に悌は英語を学んでいた。

渡米した上田悌は、ワシントン州のランマン家に寄宿するが、最年長ということもあり、ホームシックになったらしく体調を崩し、明治５年（1872）１０月に、一年で脱落して吉益亮と共に、帰国することになる。帰国後、医師の桂川甫純と結婚して、昭和１４年、８４歳で亡くなるまで、一男四女を生んで、平凡であるが幸せに長寿を全うした。大正７年に、捨松、梅子、繁子の三人は、やっと探し当てた亮＝桂川亮子を呼び出して、懐旧の念に浸ったが、その折、亮子は「三人の活躍の報道を聞くたびに、自分だけ何も貢献できなかった」と悔やんだと言うが、平凡な生き方こそが生きがいだったのかも知れない。人の人生の幸福は、他人には計り知れない。

（２０１５・４・１５　『明治の女性留学生』―寺沢龍、高原千尋ブログ、他）おわり